郊外における地域形成と連帯

――地域祭りを介した世代間交流の可能性――

首都大学東京　大槻茂実

1　研究の背景と目的

人口減少の時代を迎えた中で、持続可能な都市の形成はいかにして可能か、様々な分野で議論が行われている。公助・共助・自助の連携の模索といった昨今の防災・災害対策の検討などはその典型例といえよう。そうした中、地域コミュニティの維持・活性化を目的として、あるいは逆の視点に立てば、住民自身の社会的孤立からの回避といった目的から、住民の地域参加に対する注目が特に近年一層高まっていると考えられる。

本報告の目的は拡大から縮小への転換が余儀なくされた現代都市における異質な地域住民の地域参加の過程と可能性を実証的に分析することにある。より具体的には、地域社会における異質な人々の関係性の構築として世代間交流に焦点をあて、世代間交流を可能とする社会的要因を探ることを目的とする。年齢や職業など異質な人々同士の関係性の蓄積が当該社会のパフォーマンスを高めることはこれまでソーシャル・キャピタルの研究などから繰り返し指摘されてきたが、本報告ではそうした異質な人々の関係性として世代間交流に着目する。その上で本報告では世代間交流に寄与する社会的装置として地域祭りや地域イベントを位置づけ、それらへの住民参加に焦点を絞り分析を進める。

2　データと研究方法

本報告では、2013 年に東京都多摩市の居住者（30 歳～79 歳の男女）を対象に行なわれた計量的調査データと、同年から継続的に進めている聞き取り調査と参与観察の結果をもとに分析・報告を行う。特に聞き取り調査と参与観察については、多摩市乞田･貝取地区を中心に調査を行っている。

本地区は 1970 年代以降に新住民が大量に流入してきたものの、多摩市の他地区と異なり、郊外開発前の古き農村的伝統も残している特色をもつ（「混住地区」）。したがって、囃子や山車といった伝統文化が独自に形成・維持されており、こうした伝統的文化の継承自体が昨今希求される世代間交流に一定度寄与していると考えられる。その一方、本地区も他地域と同様、集合住宅をはじめとした新たな居住環境が形成され、伝統的な共同体に属さずに都市的生活様式を享受する新たな住民層も多く居住しており、新旧の住民が混住し当該地域社会を形成していると考えられる。 換言すれば、こうした地域共同体との接点を異にする人々の連携こそが、人口減少を迎え流動性が高まる現代社会において検討すべき地域参加の様相であると考えられよう。

特に本研究では地域共同体との接点を異にする人々に留意しながら分析を行うが、当然ながら、それぞれの層は当該地域社会を担う住民という点では共通している。計量的調査からはその人口規模から新住民層の諸特徴が析出されると予想される。その一方で、農村共同体的伝統を色濃く継承する旧住民層の諸特徴は聞き取り調査と参与観察といった質的調査にもとづく分析から析出されると予想される。

3　本研究の特徴と分析

本報告の特徴として計量的調査と質的調査の双方から得られたデータを分析し、トライアンギュレーションを踏まえた総合的な知見の導出を行うことにある。分析を通して、地域参加の過程とその構造が内包する住民参加の包摂と排除の両面性を検討する。特に分析では計量的手法・質的手法の違いによる知見の「齟齬」が確認されており、この「齟齬」自体が本報告の特徴を示していると考える。